

<海外情報>

イタリアに見る「産業を地域に
つなぎとめるための社会的な工夫」

田中 夏子(長野大学産業社会学部講師)

はじめに

昨秋、イタリア北東部に位置するヴェネト州を訪ねる機会を得た。ヴェネトはエミリア・ロマーニャと並んで協同組合運動の盛んな地域である。ポストフォーダイズムの「騎士」として話題を集めた「第三イタリア」の一角でもあるが、ポローニャでの、革新勢力を中心とした協同組合運動に対して、ヴェネトのそれは、もっぱら「白い協同組合」すなわち保守勢力のカトリック系協同組合であるという対比で論じられる傾向が強かったこともあって、その実態が十分紹介されてきたとは言いがたい。

しかし、多様な経済主体の交錯する、地域産業をめぐる諸々の試みを、特定の政治的な意味づけへ絞りこむことはとうてい不可能であろう。とりわけ、協同組合運動のように、地域の様々な人々、様々な組織(フォーマル・インフォーマル含めて)の結節点として機能しているような場合には、ことさらそうである。

政治的に「白い」ということでは言い尽くされない多面的な意味や事実をヴェネトという地域は持っている。その、保守の革新という色分けのものと奥にある社会的・文化的土壌から、①80年代の、協同組合をふくめた小規模企業とそれらの集積・ネットワークがもたらした発展の原動力、②90年代に入ってむかえた経済危機と統合市場での競争に対して、地域産業が流出や崩壊を遂げず、どうその地域に踏みとどまろうとしているのか、その社会的耐久力について考えることが、この旅の課題である。

協同組合訪問を主眼とした旅ではなかったが、しかしイタリアの協同組合をより掘り下げた部分で理解したいという欲求に支えられての旅ではあった。協同組合運動を生み、育て、あるいは必要

に応じて再生していくその力は何なのだろうか。ひろく協同組合運動そのものがもつ伝統や感性、自己再生能力に依るところが大きいにしても、その運動を特徴づける社会的文化的基盤や社会的な諸力とでもいうべきものが存在して、その上に小規模企業や協同組合がそれら組織の固有の必要性や論理に基づいて形づくられていくのではないか。従来、イタリアのそうした社会的基盤については、「カトリックの伝統」や「家族主義的志向」「革新的政治風土」「パルチザンの気質」「都市国家の伝統と強固な地域主義」といった言葉で言及されてきた。が、もう少し具体的に、発展の原動力と社会的な耐久力に関与する、イタリア地域経済の「社会的な工夫」を描き出す必要があるのではないか。

その一環として、本稿では「産業を地域につなぎとめるための社会的な工夫」について考えてみたい。研究報告としてではなく、筆者の仕事上の経験と旅から得た、ごく限られた情報と印象に基づく論となることを、あらかじめお許しいただきたい。

「ラ・ミア・テッラ！」

—それでも否めない転職傾向に抗して—

ヴェネト州にあるヴィチェンツァ市(人口約12万人)は繊維と金属加工によって産業化を遂げた町である。ここで30年間精密機器用の金型製造と成型製造をおこなっている小企業を訪ねた。従業員30人、イタリアでは中堅の規模である。その工場働く若い青年に質問してみる。「なぜミラノみたいなどころに出ていかないでこの町で働くのですか」。彼は、妙なことを訊く、といった表情をしながら、回りの機械音の喧噪を縫うようにして答えた。「ベルケ ラ ミア テッラ！(Perhce' la mia Terra) (なぜってここが俺の地元だから

さ)。

それでも父とともにこの企業を創業したガルバニン氏(同社代表)は、「若者は依然として協同志向が強いが、ものづくりという職業に対してはもはや魅力を感じていない。スーツ着てネクタイ締めて、自動車電話で商売する独立販売代理店業が今の若者があこがれる職業人像ではないか」という。日本とやや異なるのは、地域のものづくりから離れてサービス業や販売代理店業を志向したとしても、だからといってすぐ都会志向にはならない点である。テッラ(Terra)は本来「地球」の意だが、イタリア地域社会においては物理的引力のみならず社会的引力をも有する。

ガルバニン氏は、会社代表であると同時にこの町の生産財関連企業のネットワーク、チェントロ・プロドゥッティヴィタをも組織する。もともと敗戦後アメリカによってイタリアの各都市に「生産性本部」がつくられたが、ほとんどのところはその後自然消滅、現代的な形に再生して活動を維持・発展させているのはヴィチェンツァが唯一であるという。彼は、若者の製造業離れ(特に転職傾向)の一つの要因を、労働世界に放り込まれた後の教育機会の少なさにあるとする。だからこの世界に入った若者に対して「仕事の文化」を供するような機会の必要性を唱え、その部分で上記のネットワークを活用していこうとしている。技術的、実践的な教育は、企業横断的とはいかず、それぞれの企業にゆだねるしかないが、たとえば私たちが訪問したその日の晩に、彼らの主催でおこなわれたセミナー「工作機械の高速稼働による加工作業の問題点」などはおよそ金属加工に携わる人々にとっては共通の「仕事の文化」を形成しうる。その機会づくりを地域の産業ネットワーク、チェントロが担おうというわけである。

学校と労働世界を橋渡しする試み

確実に進行する若者の製造業離れに対し、たとえば、ヴェネト州北東部の山間地域の町ベッルーノでは、地元の工業会の青少年部会の企画によって、就業前の青少年の、地域産業に対するアイデ

ンティティー形成を試みる。

ベッルーノというのは、製造業企業数507のうち、333企業が、また住民数36,000人のうち、約6分の1にあたる5,790人が眼鏡製造業に従事している、100年の伝統を持った眼鏡製造の代表的な産地である。イタリア経済の大きな特徴の一つとされてきた産地形成が、90年代に入ってからなみ雇用人数、企業数、生産高とも失速を迫られており、その終焉論すら耳にする状況の中、ベッルーノでは、90年に入っても眼鏡関連部門で雇用人数増加率20%を示すほどの健在ぶりである。

さて、このベッルーノ地元工業会では、地域産業に関する授業カリキュラムを高校の正規の授業の中に組み込んで、青少年にとって地元で働くということがどのようなものか、その労働世界の見通しをよくしようとはかった。対象は、次の年に高校の最終学生を迎える青少年で、職業高校、商業高校、普通高校問わず、導入されている。「ものづくりの世界」(“Il mondo di fare”)と名付けられたこのカリキュラムは「地域の経済的現実」「産業と行政の望ましい関係」「期待される職業的専門性」などの内容から構成され、92年3月の段階で、70コースが完了、1,550人のコース修了者を輩出している。

むろんこうした施策の効果が出るのはまだ時間がかかるであろうし、他の産業の失速ぶりに比して、ベッルーノが産地として成長している要因を安易にこうした施策に求めることは危険であろう。しかし、少なくとも地域のものづくりを空洞化させまいとする社会的な工夫の存在は、見て取れるのではない。

「そこにいけばすべてある」

小宇宙としての町一見本市の効用

全くの私見だが、イタリア産地が危機をむかえているとはいえ、ある程度の凝集性を持ちながら今日に至ったのは、このように地域産業に対するアンデンティティが形を変えつつも再生産されてきたからではないか。

イタリアは見本市開催のとりわけ多い国だ。し

かし開催数の多さが特徴なのではない。国際規模の大型見本市の開催地が地方都市に分散している点の特徴なのである。自分の住んでいる町のはずれに広大な見本市スペースがあって、地域の催しとともに年に一度か二度、比較的規模の大きい国際見本市が開催される。多くの場合ある製品の代表的産地が、あるいは産地に隣接した町が、その製品の国際見本市会場となる。産地の人々は、自分たちの生活をささえる産品に対して世界からどのような注目と需要が寄せられるのかを日常的な風景の中に捉える。自分たちが携わる生産労働に対する社会的評価を世界規模で目の当たりにする。たとえば今回訪ねたヴィチェンツァは、貴金属宝飾品とその宝飾品を生産加工するための設備機械および工具に関する見本市「ヴィチェンツァ・ドーロ」(Vicenza d'oro)の開催地である。ここから車で小一時間のところにあるヴェローナ市は、農産物加工品やワインの産地であるため、こうした製品の見本市が開催されるのはもちろんだが、それを生み出す生産財や設備(農業機械や農産物加工機械)の見本市や大理石・石材加工機械見本市も国際的に著名であることを誇るものだ。

製品とそれを生み出す生産財(機械)、さらにその技術を転用した関連産業……と、異なる産業が関連しながら展開していくことは、当然のようではあるが、日本の産地研究に携わっている方から教えていただいたところによると、日本の産地では製品と生産財の製造が切り離されているという。

産地の凝集性は、単に関連企業の集積という物理的な完結性によって保持されるものではなく、《そこにいけばすべてである。製品も機械も技術も生産現場もそこで実際に働いている人々も、その生産を維持してきた制度、風土や文化まですべてである》、そうした小宇宙といもうべき社会的な完結性によっても支えられているのではないか。

日本の見本市の開催地についていえば、主要な国際見本市は晴海、幕張、大阪などに集中している。だから企業が企業に対して商売をするのであ

り、地域に入る余地はない。見本市が産地にある場合には、地域が商売をする。地域そのものが産業のフロンティアに立つ仕組みの一つがこうした見本市文化に象徴される。

地域産業の空洞化に抗する

地域産業の空洞化が一方的には進まない、社会的な装置の一例として、筆者の乏しい経験から心あたりのことを述べてきた。

本稿で、地域産業とそれに対するアイデンティティの形成という論点にこだわったのは、理由がある。現在筆者の存在する長野県でも、中小規模の工場閉鎖のニュースと親会社や中堅企業による生産拠点の海外移転のニュースが入れ替わり立ち替わり報じられていく。80年代、フリードマンによって高く評価され、以降国内はもちろん海外からもおびただしい量の視察団を迎え入れた中小企業の町、坂城とて例外ではない。

親会社の収益性やイニシアティブだけで決まっていく日本の地域産業のあり方にとって、微細ながら網の目のように、地域産業を引き留める社会的な装置とでもいうべきものの存在するイタリアの地域産業のあり方は、何らかの示唆を見いだす対象とはならないだろうか。「経済生活」はいうまでもなく、企業だけのものではない。しかしそれが社会のものであって、社会のイニシアティブで牽引されるべきだという当然のことが私たちの社会では成立しにくいことも確かだ。

もちろんイタリアにおいても空洞化の危機が進行していなわけではない。

協同組合運動による、社会的経済の提起は、産業形成の段階では調和的に機能していた「産業を地域につなぎとめる諸力」が、市場統合や経済危機の中で後退を迫られ始めた、という現状認識とどこかで結びついた上で、その再生をかかげるものとしても考えられないだろうか。